

## [研究論文]

## 学校教科書にみられる日本語の程度副詞

—「とても」「非常に」「きわめて」について—

渡 辺 史 央

## 要旨

本研究は、日本語の程度副詞「とても」「非常に」「きわめて」について、国立国語研究所が作成・公開している『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）の教科書コーパスを用いて、出現回数、文末文体、学年別および教科別出現状況、さらには共起する属性語をみることで、その三語の副詞の使用実態の様相を明らかにしようとするものである。分析の結果、(1)「非常に」が教科書においてもっとも多く使われていたこと、(2)「とても」は主に「です・ます体」の文体で現れるが「だ・である体」にも一定程度現れており、一方、「非常に」「きわめて」が現れる文体は、ほぼ「だ・である体」であること、(3)「とても」は学校教科書において学年問わず幅広く使用され、「非常に」「きわめて」は、高等学校教科書での使用がきわだてて多いこと、(4)「とても」は一般的で日常的な語でかつ、話し手の評価を表す属性語と共起することが多く、「非常に」は数量や形状、物事の状態を表す語と共起することが多いこと、(5)「きわめて」は、判断や評価を表す抽象的な語とも共起し、共起する属性語が他の副詞と比べ多岐にわたっていたことが明らかになった。

キーワード：BCCWJ、学校教科書、程度副詞、「とても」「非常に」「きわめて」、文体差、属性語との共起

## 1. はじめに—問題の所在—

筆者は、外国人留学生の初年次教育における日本語クラス（必修外国語）において、さらには、日本人学生対象の初年次教育においてもアカデミック・ライティング指導に数年間にわたり携わってきた。本研究で分析対象とする程度の大きいことを表す程度副詞の「とても」「非常に」「きわめて」は、アカデミック・ライティングの授業では、その使い分けについては「書き言葉か話し言葉か」「フォーマルかインフォーマルか」「硬い表現か軟らかい表現か」ということで説明されることが多い。渡辺（2010）では、日本人学生と外国人留学生の論述文に現れる副詞表現に注目し、山田文法における「情態」「程度」「陳述」の三分類法<sup>(1)</sup>をもとに、分析を行った。その結果、日本人学生および外国人留学生の双方の論述文において程度副詞の出現が多く見られ、程度が高いことを表す「非常に」「とても」については、日本人の論述文では、「とても」を「非常に」より語彙選択する傾向があること、一方、留学生の論述文では、「とても」よりも「非常に」を選択する傾向が強いことから、論述文作成において、日本人学

生は話し言葉としての意味合いが強い「とても」を多用し、留学生は書き言葉としての「非常に」をあえて語彙選択して使用していることが明らかになった<sup>(2)</sup>。筆者の経験からも、留学生の場合、日本語学習の段階において、初級で「とても」が最初に提出され、中級、上級となるにしたがって、書き言葉的な表現を学習することになり、さらに、アカデミック・ライティングの指導を受ける中で、同義をもつ副詞の使い分けについて習得していくケースが多いと考える。それを実証するのが、永岡（2009）である。永岡（2009）では、代表的な中級以上の計7冊の日本語教科書を対象に、論文・レポートの文体の指導項目（文末文体、接続表現、副詞、縮約形）を比較調査している。永岡の調査によって、副詞がもっとも教科書において扱われる数が多く、なかでも程度副詞がいわゆる三種（情態、程度、陳述）の副詞の中で最も多いことが明らかになった。また、永岡（2009）の調査では、「非常に」は「たいへん」と並んで7冊すべての教科書において指導項目として挙げられており、日本語教育では「たいへん」「非常に」が書き言葉としての性質が強い語であるという共通認識があることがうかがえる。さらに永岡（2009）は、「副詞は話し言葉的なものから書き言葉的なものまで、非常に語彙数が多く、日本語学習者にとっては学習の負担が大きいもの」だとし、学習者用の辞書には、話し言葉・書き言葉としての区別がないことを指摘している。阿辺川ほか（2015）では、日本の大学で学ぶ理工系学部の留学生を対象とした作文支援システム「ナツメグ」の開発に至った経緯について言及し、そのなかで、留学生は初級から中級の日本語学習では、主として話し言葉を中心に学んでいるため、上級になって「である体」「だ体」による書き言葉をなかなか習得できないことがあると指摘している。一方、日本人学生の論述文については、これらの文体差における使い分けを体系的に学ぶ機会は留学生に比べると少ないと思われる。日本人学生向けの論文・レポート作成のための教科書類を見ても、副詞の使い分けを体系的に提示しているものは数少ない。石黒（2011）は、初年次教育のアカデミック・ライティング指導においては、学術的な内容をそれにふさわしい文体で書けるようになるには話し言葉と書き言葉の区別が必要であるものの、メールやブログ、Twitter など SNS やメディアの普及にともない、アカデミックな論述文にも話し言葉が混入する現象が散見することを指摘している。さらに、話し言葉と書き言葉の区別の難しさの主な要因は、それらの境界線の曖昧さにあると述べ、副詞の「非常に」「きわめて」は書き言葉が中心であり、「とても」については、話し言葉か書き言葉かの判断は分かれる、としている。筆者も、日本人学生へのアカデミック・ライティング指導をするなかで、ここ数年でとくに日本人学生にこそ、論文・レポートにふさわしい語・表現を体系的に指導していく必要があるのではないかと考えるようになった。

そこで、上記の問題点を踏まえ、本研究では、学校教科書に着目し、程度が高いことを表す副詞「とても」「非常に」「きわめて」を取り上げ、その現れ方や扱い方についてみていこうと思う。具体的には『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, 以下 BCCWJ）の「教科書コーパス」を用い、小学校から高

等学校までの教科書における出現状況を「文体差」「学年別」「教科別」の観点からみていく。さらに、これらの程度副詞が修飾する語（属性を表す語）についてもみていく。学校教科書を分析対象として取り上げる理由は、学校教科書における副詞の扱いや文中での様相が、ある種の模範的な使い方として読み手に影響を与えている可能性があり、大学生自身が高等学校までにこれらの副詞にどのように経験的に触れているのかみていくことで、初年次教育でのアカデミック・ライティング指導にも、一定の示唆を与えることができると考えたからである。

## 2. 辞書および日本語教科書における三語の副詞の扱いについて

ここでは、市販の日本語辞典や類語辞典および日本語教科書における三語の副詞の扱い方について概観しておく。

### 2-1 類義語辞典等における扱われ方

#### ①『類語新辞典』（三省堂）

とても：（会話）非常に。大変。（異形）とっても

非常（に）：度を超えているさま。程度がはなはだしいさま。

極めて：この上なく。非常に。★やや改まった言い方。

#### ②『類語大辞典』（講談社）

●はなはだしい様子

とても：程度がはなはだしい様子。

非常に：「とても」のかたい言い方。

#### ③『類語新辞典』（角川書店）

とても：たいへん。非常に。強めて「とっても」。<sup>④</sup>

非常（に）：○普通と違って程度が甚だしいこと <sup>④</sup>

極めて：○最上に。非常に。大変 文章

一般的な類語辞典から三種類の辞書における記述を比べると、この三語の副詞は「大変」と併せて取り上げられることが多く、いずれも「程度が甚だしいこと」といった共通の意味を持ち合わせていると同時に、「とても」は会話表現として、「きわめて」は改まった言い方、文章語として取り上げられている。一方、「非常に」については、文体に関する記述は、「かたい言い方」「常体」とあり、一冊については言及がない。さらに、『副詞用法辞典』（東京堂出版）で、「とても」「非常に」「きわめて」の解説を比較してみると、意味用法として、「程度がはなはだしい様子を表す」という共通の記述があり、「とても」は、「話者の主観としての程度のはなはだしい様子を表す」（360頁）とし、「『ひじょうに』『たいへん』『すごく』などに似ているが、『ひじょうに』はややかたい文章語で、公式の発言などに多用され」とし、文体につ

いての言及がある。

## 2-2 アカデミック・ライティング指導における取り扱い

上述の永岡（2009）の分析にもあるように、日本語非母語話者向けのアカデミック・ライティング指導においては、論文・レポートにふさわしい表現の習得を目指し、「話し言葉」と「書き言葉」を比較しながら、論文・レポートで用いられる代表的な語句がリストアップされていることが多い。一方、日本語母語話者向けの論文・レポート作成用のテキストでは、これらが体系的に扱われることが少なく、授業において表現文型だけを取り出して時間を割いて指導することが日本語非母語話者と比べて少ないと思われる。以下、いくつかのアカデミック・ライティング用の教科書（日本人用、留学生用）の記載内容を紹介し、程度副詞「とても」「非常に」「きわめて」がどのように扱われているのかをみる。

### ①『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』（東京大学出版会）

「レポート・論文の表現」として、以下のように「極めて」を挙げ、意味として「とても」と記述し、英訳と例文を付している。

#### 〈記載内容〉

表現	意味	英訳	用例
極めて	とても	extremely	その可能性は極めて低い

### ②『大学・大学院 留学生のための論文・レポートの書き方④』（アルク）

「日常会話」で使う表現から、「学術的文章」で使う表現への書き換えとして以下のよう提示している。

#### 〈記載内容〉(p. 13)

副詞：とても（日常会話でよく使う表現）→きわめて（学術的文章でよく使う表現）

### ③『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習』（スリーエーネットワーク）

話し言葉から書き言葉への書き換え練習の中で、「すごく」の書き換えとして「非常に／極めて」を正答として提示している。

#### 〈記載内容〉(p. 4)

【問題】例のように下線部を言い換えなさい。

例. リチウム電池は、いろいろなものに使われている。

→リチウム電池は、（さまざまな）ものに使われている。

1. 若者の失業は、すごく大きな問題である。

→若者の失業は、（ ）大きな問題である。【解答】（非常に／極めて）

### ④『Practical 日本語 文章表現編—成功する型—』（おうふう）

「理論的な文章に求められる文体」として、書き言葉としての「である体（常体）」を

使用することが一般的であるとした上で、「会話体」→「です・ます体」→「である体」と文体差に応じて語を示している。

〈記載内容〉(p. 39)

会話体                      →    です・ます体                      →            である体  
 とっても／すごく        →        ととても                      →    たいへん、非常に

⑤『大学生と留学生のための 論文ワークブック』(くろしお出版)

この著書は、外国人留学生と日本人学生を対象にしたものである。その基礎編では、論文によく使われる語と表現を、話し言葉特有の語や表現と比較対照しながら紹介している。

〈記載内容〉(p. 6)

論文で使ってはいけない語と表現	論文で使われる語と表現
すごく難しい問題	たいへん／非常に難しい問題

ここからわかるように、主に留学生を対象とした学習書では、「とても」を、「普段使うことば／話し言葉／会話表現」とし、それと対照的に「書き言葉／論文・レポートに相応しい表現」として「たいへん(大変)」「非常に」「きわめて(極めて)」が挙げられているケースが多いが、その取り上げられ方は一様ではない。

### 3. 調査および結果と分析

ここでは、「とても」「非常に」「きわめて」の三語の副詞について、具体的に学校教科書における現れ方についてみていく。

#### 3-1 調査方法

まず、国立国語研究所が作成、公開している BCCWJ の教科書(2005～2007 年、412 件、約 90 万語)のサンプル文に検索をかけ、「とても」「非常に」「きわめて」の出現回数についてみた。そして次に、文体差、学年別、さらには教科別にそれらの副詞の出現状況について調べた。今回の調査では、会話体での使用にはほぼ限定されている「とても」のさらにくだけた表現である「ととても」については、対象外とした。その結果、それぞれの出現回数は「きわめて」57 例、「非常に」73 例、「とても」54 例となった<sup>(3)</sup>。漢字表記とひらがな表記があるもの(「きわめて／極めて」「ひじょうに／非常に」)については、両方について抽出した<sup>(4)</sup>。表 1 に三語の副詞の出現回数を示す。

以下、これらの副詞の現れ方について詳しくみていく。

表1「教科書」サンプルにおける出現回数

語	出現回数
とても	54
非常に	73
きわめて	57

### 3-2 結果と分析

これら三語の副詞について、文体差、学年別、教科別における出現状況を調べた結果、表2のようになった。

表2「文体差」「学年別」「教科書別」にみた出現回数

	文体・スタイル	数	小学校	中学校	高等学校
とても	です・ます	34	27 (国語 4、社会 14、数学 7、理科 1、芸術 1)	3 (技術家庭 2、外国語 1)	4 (保健体育 1、外国語 2、芸術 1)
	だ・である	14	2 (国語 1、社会 1)	3 (技術家庭 1、外国語 1、国語 1)	9 (国語 3、技術家庭 2、外国語 1、理科 1、情報 2)
	会話	5	2 (社会 2)	1 (社会)	2 (外国語 2)
	不明	1			1 (芸術 1)
非常に	文体・スタイル	数	小学校	中学校	高等学校
	です・ます	4	1 (社会 1)	0	3 (社会 1、技術家庭 1、保健体育 1)
	だ・である	69	2 (社会 2)	4 (国語 1、理科 2、社会 1)	63 (国語 3、数学 1、社会 11、保健体育 1、理科 39、外国語 1、情報 3、技術家庭 1、芸術 3)
	不明	0			
きわめて	文体・スタイル	数	小学校	中学校	高等学校
	です・ます	3	0	1 (理科 1)	2 (保健体育 1、芸術 1)
	だ・である	53	0		53 (国語 5、数学 1、社会 17、保健体育 1、理科 21、技術家庭 2、芸術 6)
	不明	1			1 (芸術 1)

次頁、それぞれについて詳述する。

### 3-3 文体差との関係

「文体」の定義や分類、さらには何をもって文体を決定づけるのかには諸説がある<sup>(5)</sup>。宮島（1977）では、「単語の文体的特徴は、文章の文体を決定する一つの要素」であるとし、単語を「文章語」「日常語」「俗語」と三分類し、それぞれ定義づけをしている<sup>(6)</sup>。井上（2009）では、論説文に用いられる語の適切性について『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を対象に、文体の観点から考察している。その上で、宮島（1977）の分類を「俗語<くだけた日常語≤無色透明な日常語<あらたまった日常語<文章語」のように記号で提示し、「≤」が論説文における適否を分ける基点だとしている。一方、日本語教育における「文体」の扱い方も一様ではない。高野（2011）では、日本語非母語話者向けの日本語学習用教科書（初級5種類、中級以上10種類）において、「文体」がどのように扱われているのかについてその用語の取り扱いを中心に分析している。その結果、初級教科書においては、文体が文法事項として扱われているケースが散見され、「ます形—辞書形」「polite form—plain form」といった用語で提示されていることが特徴として挙げられている。また、中級以上になると、「丁寧体／普通体」「です・ます体／だ・である体」の2種類、もしくは「です・ます体／だ体／である体」の3種類が主流であると分析し、「だ体」「である体」の使い分けについては、教科書によって説明に違いが生じていることについても指摘している。

本稿では、まず「文体」の分類について、文末表現による分け方を踏襲し、「です・ます体」と「だ・である体」の二分類として捉える。その上で、宮島（1977）の「単語が文体を決定づける一要素」であるという見解にたち、実際に三語の程度副詞が、どのような文体のなかで現れているのかについて、抽出されたサンプル文を検証し識別を行った（グラフ1～3）。なお、サンプル文からは文体が認定できないものについては「不明」とした<sup>(7)</sup>。

その結果、「とても」は、「です・ます体」（34例）、「だ・である体」（14例）であり、「です・ます体」で現れるケースが「とても」が現れる全体（54例）の6割強を占めた。また、会話スタイルの文にも5回現れていた。以下、例文における下線は筆者によるものである。

例：日曜日に、家ぞくでろっこう山へハイキングに行きました。てんぼう台からのけしきがとてもきれいでした。（社会／小『新しい社会3・4上』）

例：「とてもたくさんの部品があるんだね。」（社会／小『新しい社会5上』）

「だ・である体」で出現する例としては、以下のようなものがあった。

例：「自分らしい生き方」を求めて自分の可能性にチャレンジすることはとても大切なことである。しかし、人はたったひとりでは生きられない。（技術家庭／高『家庭基礎自分らしい生き方とパートナーシップ』）



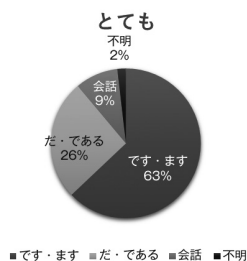
「非常に」は、「です・ます体」(4例)、「だ・である体」(68例)と、「だ・である体」で現れるケースが文全体(73例)の約9割を占めた。なお、表記に関しては、ひらがな表記13例のうち、「です・ます体」は7例、「だ・である体」は6例であり、表記と文体との関連性は今回の調査からはみられなかった。

例：オーストラリアは、羊毛，肉類，小麦などの農産物を含めて，一次産品のひじょうに豊富な国である。(芸術／高『音楽Ⅲ』)

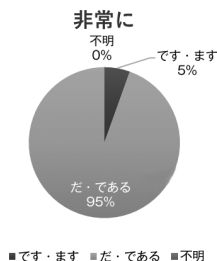
「きわめて」は、「だ・である体」が57例中53例と、約9割を占めた。「です・ます体」が用いられている例は、3例のみであった。

例：当時の肉筆文字として極めて貴重です。(芸術／高『書道Ⅲ』)

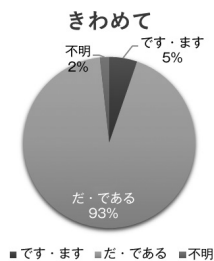
以上のことより、「とても」は「です・ます体」に現れる傾向が強いが、会話文や「だ・である体」にも一定程度現れていることがわかった。一方、「非常に」「きわめて」については、ほぼ「だ・である体」において出現した。石黒(2011)では、書き言葉と話し言葉の区別をつけることが困難であることを指摘した上で、「話し言葉専用」「書き言葉専用」「話し言葉・書き言葉兼用」という区分法を提案している<sup>(8)</sup>。さらに石黒(2011)は、その区分法によって、「非常に」「きわめて」を書き言葉専用、「とても」を話し言葉・書き言葉兼用の程度副詞であるとしている。「話し言葉」を「です・ます体」および「会話文」、「書き言葉」を「だ・である体」とするならば、学校教科書においても、石黒の見解にほぼ一致した結果がみられたことになる。



グラフ1  
文体別出現率「とても」



グラフ2  
文体別出現率「非常に」



グラフ3  
文体別出現率「きわめて」

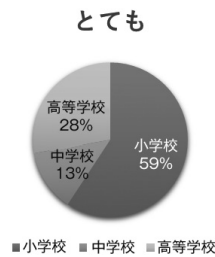
### 3-4 学年別出現状況

次に、学年別に三語の副詞の現れ方をみると、以下のようになった。



表3 学年別出現回数（「とても」）

学年	出現回数
小学校	32
中学校	7
高等学校	15
計	54

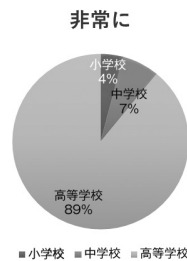


グラフ4 学年別出現率（「とても」）

「とても」は、54例のうち、小学校で32例あり、比較的小学校の教科書に現れやすいと言えるが、中学校が7例、高等学校で15例と一定程度現れ、学校教科書においては、学年に関係なく幅広く使用されていることがわかる<sup>(9)</sup>。

表4 学年別出現回数（「非常に」）

学年	出現回数
小学校	3
中学校	5
高等学校	65
計	73



グラフ5 学年別出現率（「非常に」）

「非常に」は、高等学校教科書での使用がもっとも多く、文例全体の約9割を占めた。一方、小学校3例、中学校5例にとどまった。

表5 学年別出現回数（「きわめて」）

学年	出現回数
小学校	0
中学校	1
高等学校	56
計	57



グラフ6 学年別出現率（「きわめて」）

「きわめて」についても、9割以上が高等学校教科書で出現し、中学校で1例、小学校には文例がなかった。以上のことより、「とても」→「非常に」→「きわめて」と、学年が上がるにしたがって、教科書における使用頻度も上がることがわかった。

### 3-5 教科別出現状況

各教科別出現状況をみる前に小学校、中学校、高等学校における各教科について概観しておく。小学校では、国語、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭、体育があり、そのうち、理科と社会は3学年から、生活は1、2学年の間、教科書を使用して教えられる。中学校では、国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭、外国語が1学年から、高等学校では、国語、地理歴史、公民、数学、理科、保健体育、芸術、外国語、家庭、情報が必修教科、科目として提示されている<sup>(10)</sup>。三語の副詞の教科別出現回数は表6のようになった。

表6 教科別出現回数

「とても」		「非常に」		「きわめて」	
教科	出現回数	教科	出現回数	教科	出現回数
社会	19	理科	41	理科	22
国語	9	社会	15	社会	17
外国語	7	国語	5	芸術	8
数学	7	芸術	4	国語	5
技術家庭	5	情報	2	保健体育	2
情報	2	保健体育	2	技術家庭	2
理科	2	外国語	1	数学	1
芸術	2	技術家庭	2	計	57
保健体育	1	数学	1		
計	54	計	73		

「とても」については、「社会」が54例中19例ともっとも多く、全体の約三割強を占めている。「非常に」および「きわめて」については、「理科」「社会」で約7割を占めることがわかる。なお、「理科」「社会」については、小学校では3学年から学習する。一方、「非常に」は41例中、中学校で1例、高等学校では40例出現し、「きわめて」については、22例中、中学校で1例、高等学校で21例出現していることから、ほとんどが高等学校の理科の科目で出現していることがわかる。高等学校では、教科としての理科は「理科基礎」「理科総合」「物理」「化学」「生物」「地学」と科目が多岐にわたり、それに応じて教科書類も多くなるため、必然的に出現回数が多くなっていることが考えられる。

### 3-6 属性語との共起

副詞は、それだけで自立していて、用言（動詞や形容詞）を修飾しその様子や程度について

述べることを第一の働きとし、さらには叙述内容についての判断や態度などを述べ立てる働きをもつ。そのうち、程度副詞は、主に属性を表す語に先行し、その属性の程度限定を行う副詞である。森田（2008）では、一般の文法書における副詞の種類は「情態副詞」「程度副詞」「陳述副詞」であるとした上で、程度副詞については、「事物の程度や量的概念を修飾する」語としている。その多くは、「①形容詞や形容動詞といった情態性の属性に対し、それがどの程度かを修飾限定」するもの（例：「かなり難しい」「すこぶる面倒だ）、②動詞の意味する状態性・動作性を量的視点からどの程度かとらえる」もの（例：「よほど疲れたのだろうか」「かなり片付いた）、③程度・量的概念の体現（空間的・時間的広がりを目指す名詞。すなわち方向・場所・時間・数量などを意味する名詞）」を後接されるもの（例：「かなり遠方の地域」「もっとと右）、④情態副詞を修飾」するもの（例：「かなり はっきり言ったつもりだが、⑤「叙述判断が可能な程度副詞」が「断定の助動詞」とともに使われる（例：「もう少しです」「寝込んでしまうとはよほどだ」）などを挙げている。ここでは、森田（2008）の「事物の程度や量的概念」を表す語を「属性語」ととらえ、主に①②③④の用法に限定し、どのような属性語と共起しているのかみていく。具体的には、BCCWJの付与情報として抽出されたサンプル文から、それぞれの副詞がどのような属性語を後接しているのか、その共起関係についてみる<sup>(11)</sup>。

以下、表7に、共起する属性語の一覧を示す。

表7 副詞（「とても」「非常に」「きわめて」）と被修飾語

とても（54例）	出現回数	ひじょうに（13例） ／非常に（60例）	出現回数	きわめて（53例）／ 極めて（4例）	出現回数
大切	8	多い	8	大きい／大きな	5
にぎやか	3	むずかしい	4	小さい／小さな	5
重要	3	大きい／大きな	5	多い	3
おいしい	2	小さい	4	複雑	3
きれい	2	薄い	3	ゆっくり	2
ふしぎ	2	速い	3	低い	2
よい	2	長い	3	少ない	2
楽しい	2	低い	2	重要	2
むずかしい（難しい）	2	安定	2	高い	2
いい	1	微妙	2	かたい	1
こむ	1	短い	2	役にたつ	1
ふくぎつな	1	近い	2	やわらかい	1
すてき	1	遠く	2	よい	1

とても (54 例)	出現 回数	ひじょうに (13 例) ／非常に (60 例)	出現 回数	きわめて (53 例) ／ 極めて (4 例)	出現 回数
たくさん	1	遠方	2	よく (溶ける)	1
気をつける	1	重要	2	不確か	1
つらい	1	限る	2	低湿	1
のろい	1	高い	2	例外	1
はなやか	1	はっきり	1	多数	1
ややこしい	1	もつ	1	希薄	1
よく (伝わる)	1	やさしい	1	広範	1
不便	1	ゆるやか	1	弱い	1
不思議	1	よく	1	強い	1
人気がある	1	わずか	1	接近する	1
印象深い	1	優れる	1	新しい	1
喜ぶ	1	危険	1	日本的	1
多い	1	大切	1	明確	1
大事	1	平ら	1	有効	1
寒い	1	強い	1	正確	1
持つ	1	役だつ	1	活発	1
新しい	1	敏感	1	独創的	1
有名	1	深い	1	甘い	1
激しい	1	清潔	1	短期間	1
落ち着く	1	激しい	1	簡単	1
親切	1	濃い	1	純粹	1
速い	1	異なる	1	美しい	1
長い	1	発達	1	規則的	1
静か	1	大規模	1	貴重	1
計	54	豊富	1	遅い	1
		軽い	1	長い	1
		高密	1	低濃度	1
		計	73	計	57

さらに、これらのリストを質的データ分析ソフト『NVivo』を用いて単語クラウドを作成した。これは頻度の高い順から文字の大きさが小さくなっていくグラフィックで、視覚的に結果をみることができるものである。単語クラウド作成の際、類義語表現までを一つのグループと

して捉えて区別する機能を用いて行った結果が図1～3である。なお、検索をかけるにあたって、ひらがな表記では二語として分割されてしまう場合は、一語として認識するように漢字表記にした。

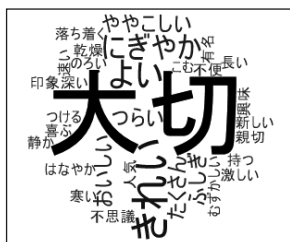


図1「とても」と属性語

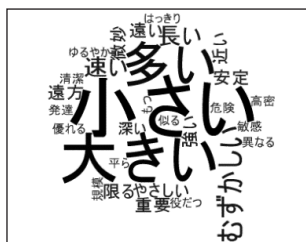


図2「非常に」と属性語

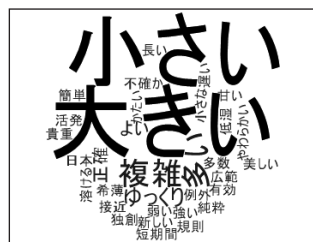


図3「きわめて」と属性語

その結果、「とても」は、「大切／重要／大事」といった話し手の判断による属性を程度限定する文で出現することが多く、その他「よい」「きれい」「親切」「不便」「むずかしい」「にぎやか」など、比較的一般的で日常的な語と共起していることがわかる。

例：「自分らしい生き方」を求めて自分の可能性にチャレンジすることは、とても大切な  
ことである。(技術家庭／高『自分らしい生き方とパートナーシップ』)

「非常に」は上述したように「理科」の教科書において現れやすく、なかでも量や濃度、速さなどを表す語や、さらには形状や大きさ（大きい、小さい、長い、深い、平ら、ゆるやかなど）を表す語と共起しやすいことが特徴としてみられた。

例：例えば，大気が大規模に上昇している赤道域では，雲がたくさん発生し，降水量も非常に多い。(理科／高『高等学校 理科総合 A』)

例：そのため、分裂の速度は一般の体細胞分裂と比べて非常に速く、割球の大きさも卵割が進むにつれてしだいに小さくなる。(理科／高『新編理科総合B』)

例：木星や土星と天王星・海王星は、地球などとくらべて非常に大きく，固体の表面をもたない惑星である。（理科／高『高等学校地学Ⅱ』）

「きわめて」は、「非常に」と同様、数量や形状、物事の状態を表す語と共起する一方、それ以外にも「例外」「日本的」「独創的」「貴重」といった評価を表す抽象的な語とも共起し、「とても」が日常的な語と共起することと対照的である。

例：そして、こんなにも日本人が会話の中でよく使う以上、この言葉には、きわめて日本

的な意味がこめられているにちがいない、と思い始めた。(国語／高『国語総合』)

例：(中略)、いくつかの類型に分類することは、結果を考察する際にきわめて有効である。  
(理科／高『高等学校生物Ⅱ』)

#### 4. まとめと今後の課題

以上、国立国語研究所が作成、公開している『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)のなかの教科書(2005～2007年、412件、約90万語)を用い、程度副詞の「とても」「非常に」「きわめて」の出現状況について、出現頻度、学年別、教科別にみた。さらには、それらの程度副詞が修飾する属性語について、その特徴について概観した。以下、まとめと今後の課題について述べる。

##### 4-1 まとめ

調査分析の結果、明らかになったことは以下の通りである。

- (1) 三語の副詞のなかでは、「非常に」が教科書においてもっとも多く使われていた。
- (2) 「とても」は「です・ます体」が主流であるが会話文や「だ・である体」にも一定程度現れており、「非常に」「きわめて」については、ほぼ「だ・である体」での使用であることがわかった。
- (3) 学年別にみると、「とても」は学校教科書において小学校、中学校、高等学校で幅広く使用されている。「非常に」「きわめて」は、高等学校教科書での使用がもっとも多く、文例全体の約9割を占めた。「とても」→「非常に」→「きわめて」と、学年が上がるにしたがって、教科書における使用頻度が高くなることがわかった。
- (4) 共起する属性語についてみた結果、「とても」は比較的一般的で日常的な語でかつ、「大切／重要／大事」「よい」「きれい」など話し手の評価を表す語と共起する傾向があることがわかった。「非常に」は「理科」の教科書で出現が多く、数量、濃度、速さ、形状などを表す語と共起することが多かった。また、「きわめて」も特に「理科」の教科書において「非常に」と同様の現れ方をするが、それ以外にも判断や評価を表す抽象的な語とも共起し、属性語が多岐にわたっていた。

##### 4-2 今後の課題

今回のサンプル文は限られた分量であったため、コーパス資料をさらに充実し、さらに有効な量的分析をする必要があると同時に、大学の専門教育における入門書などを対象とした同様の調査も必要である。また、文体差と共起語との関連性についても詳細な検証が必要であろう。

周知のように、高大接続の学びの観点から日本人学生の初年次教育におけるアカデミック・

ライティング指導の重要性は年々高まっている。それを鑑みても、論理的思考やレポートの構成、各論の役割といった組み立てに関する知識のみならず、話し言葉と書き言葉の区別が曖昧な副詞表現を含め、論述文での実例を提示するなど、論述文にふさわしい日本語表現を適切に使用できるように指導していくことがますます求められると言えよう。

## 注

- (1) 山田(1908)は、三分類以外に、いわゆる感動詞、接続詞にあたるものを「感動副詞」「接続副詞」とし、その理由として格変化や活用がないこと、他の語の表す内容を詳細に規定するといった副用言としての性質を所有していることを挙げている。
- (2) 調査の対象となった留学生のうち、漢字圏の留学生が大半であった。中国語に日本語と同形の「非常」があることから、そのことによって「とても」よりも「非常に」を選ぶ傾向があるのではないかとの見方もできるが、これについては、日本語の「とても」に相当する中国語の「很」との関係性、さらには、これらの文体的制限と程度修飾する語の範囲などについても考慮したさらなる検証が必要である。中国語と日本語の程度副詞の対照研究の代表的なものに、時衛国(2009)があるが、このなかで、時は、従来の中日対照研究において、文体と程度性との関係についての検証は十分にはされていないことに言及している(p.95)。
- (3) ただし、「とてもできない」のような否定的用法については除外とした(57件数3件)。
- (4) ただし、後接する語がなく、単独で現れる場合(例えば音楽用語などの意味そのものを説明する場合で出現した場合は、リストから外した(例: assai…非常に)。また、副詞的用法ではないものについても除外している(例:「～はきわめてだ。」)。
- (5) 『日本語学研究事典』(262-263)では、文体の種類を、表記、語法、文末表現、文章の種類、文章の用途、ジャンル、時代、表現主体の属性、作家等約17の種類に分けている。
- (6) 宮島(1977)は、「文章語」を、「もっぱらかきことばや、あらたまつたはなしことばだけにつかわれるもの」、「日常語」を「積極的な文体の特徴をもたず、どのような種類のはなしことば、かきことばにも自由につかわれる中立的な」なもの、「俗語」を、「かきことばにはあらわれず、もっぱらくだけた、下品なはなしことばでつかわれるもの」としている。なお、日常語については、「無色透明な日常語」「あらたまつた日常語」「くだけた日常語」と下位分類し、その例として類義語の「わたくし-わたし-あたし」「どちら-どれ-どっち」を挙げている。
- (7) いずれも「芸術(音楽)」の音楽記号の説明部分であった。  
例: *dolciss*…(*dolcissimo*の略)きわめて甘くやわらかに(芸術/高『音楽Ⅲ』)
- (8) 石黒(2011)では、話し言葉と書き言葉の区別の難しさについて言及し、以下のようにまとめている。  
①話し言葉と書き言葉は「らしさ」という程度の問題で、段階性がある。  
②話し言葉と書き言葉には、当該の文脈やジャンルへの適切性など、硬さ-軟らかさという1本の軸だけでは測りきれない面がある。  
③話し言葉と書き言葉は同じ語でも統語的な働き(品詞)によって文体が異なる。
- (9) なお、「とても」のよりくだけた表現である「とっても」については、2例ヒットし、いずれも小学校の教科書で現れていた。  
例: ですから、歯の全体を使ってよくかむことは、体全体の成長や活動にとっても大切です。



(国語 / 小学『国語 四上 かがやき』)

(10) 平成 14 年 (2002 年) の学習指導要領改正に伴う教科編成であり、本調査対象とした「書き言葉コーパス」におけるサンプル文は、2005 年～2007 年の学校教科書が対象となっている。

(11) 以下の点について考慮し、共起関係についてみた。

- ① 形容詞が二つ続く場合は分解する (例「とても不便でややこしい」→「とても不便」「とてもややこしい」)。
- ② 複数の表記で現れた場合は、統一する (例: 「むずかしい」と「難しい」が出てきた場合→「難しい」で統一)。
- ③ 「非常によく似た」のように副詞が並んで出現している場合は、「非常によく」で一例としてカウントした。
- ④ 語形変化のあるもの、「多い」と「多く」は分けない。
- ⑤ 「大きな」と「大きい」、「小さな」と「小さい」は分けない。

## 参考文献

- 阿辺川武・八木豊・ホドシチェック・ボル・仁科喜久子 (2015) 「アカデミック・ライティングに見られる副詞に関する分析」『第 8 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』289-296 国立国語研究所
- 石黒圭 (2005) 『よくわかる文章表現の技法Ⅲ 文法編』 明治書店
- 石黒圭 (2011) 「話し言葉と書き言葉 一初年次教育の基礎資料として」『言語文化 48 号』15-35 一橋大学語学研究室
- 井上次夫 (2009) 「論説文における語の文体の適切性について」『日本語教育 141 号』57-67 日本語教育学会
- 時衛国 (2009) 『中国語と日本語における程度副詞の対照研究』 風間書房
- 高野愛子 (2011) 「日本語教育における文体指導—用語の扱われ方をめぐる諸問題—」『語学教育研究論叢 第 28 号』303-322 大東文化大学語学教育研究所
- 永岡悦子 (2009) 「日本語教科書における論文・レポートの文体の指導項目—中上級日本語教科書の比較から」『流通経済大学社会学部論叢 20 (1)』33-45 流通経済大学
- 宮島達夫 (1977) 「単語の文体的特徴」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』871-903 明治書院
- 森田良行 (2008) 『動詞・形容詞・副詞の事典』 東京堂出版
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館出版
- 渡辺史央 (2010) 「論説文に現れた副詞の分析—留学生と日本人学生の作文より」『京都産業大学論集人文科学系列 41 号』77-92 京都産業大学

## 参考資料

- 大野晋・浜西正人 (1994) 『類語新辞典』(第 25 刷) 角川書店
- 柴田武・山田進 (2002) 『類語大辞典』 講談社
- 中村明・芳賀綏・森田良行 (2005) 『類語新辞典』 三省堂
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『副詞用法辞典』 東京堂出版
- 飛田良文・遠藤好英ほか (2007) 『日本語学研究事典』 明治書店

## 参照した日本語教科書

- 鎌田美千子・仁科浩美（2014）『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習』スリーエーネットワーク
- アカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2015）『大学・大学院 留学生のための論文・レポートの書き方④』（改訂版）アルク
- 清水明美・岩沢正子・加藤清・武田明子・福沢健編『プラクティカル日本語 文章表現編 一成功する型一』おうふう
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子（2009）『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版

## 使用データ

- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』少納言（[www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search\\_form](http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search_form)）最終閲覧日：2019年11月29日

